資料紹介

京都府北部における最近の古墳発掘調査

堤　圭三郎
吉本　堯俊

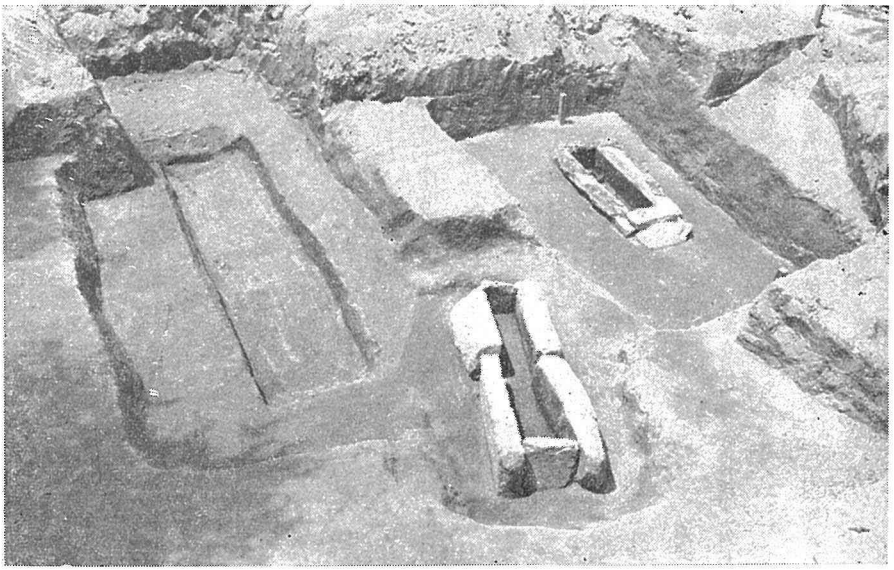
京都府北部における古墳といえば、梅原末治博士によって報告された蛭子山古墳・作り山古墳・産土山古墳、あるいは樋口隆康博士によって報告された網野岡古墳・桃谷古墳などあるが、学術調査を経たものが南部の山城地区に比して少いのは、この地方の開発が遅れた為に遺跡の破壊される事が少なかった事も与っていたのであった。ところが、開発の手はこの地方の山間の小盆地や裏日本の海辺にも迫っており、この数年間にブルドーザーの牙の下に消え去った遺跡も少くないのである。そして、ここに掲げる五遺跡の発掘は、すべてこれらの破壊されて行く諸遺跡に対して京都府教育委員会が行った事前調査なのである。

しかしその結果、作り山古墳に酷似する愛宕山古墳の箱式石棺、宝蔵山第四号墳の壺棺や甕を利用した円筒状の棺、あるいは成山第二号墳の舶載の飛禽文鏡など注目すべき遺構や遺物が出土したので、ここで簡単な紹介を行ないたい。

愛宕山古墳

京都府与謝郡加悦町明石表谷、加悦谷の東方丘陵（通称愛宕山）の稜線上に数基の古墳が並んでいるが、昭和三九年に加悦町郷土史会会員がそのうちの一基の墳頂より土師器五個を採集した事によって、その一端が知られるに至った。そのため京都府教育委員会が発掘調査する事になり、昭和四〇年八月三日から八月一八日まで約二週間実施された。

墳丘は、径約二五m、高さ約三mの円墳で、耕作によって削平された平坦な墳頂部に四個の主体部（第一図）が遺存していた。



第一図　愛宕山古墳
第三主体部（左）　第一主体部（中央）　第二主体部（右）

発見の順序に従って番号を付して呼ぶ。

第一主体部　第四主体部の南側、第三主体部と第四主体部との間にあり、第三・第四主体部の一部を破壊して設けられている。長さ約二・七m、幅約一・五mの壙に八枚の花崗岩の板石（側壁と蓋石は各二枚）で構成された箱式石棺を置く。棺は主軸をほぼ東西に置き、内法の長さ約一・五m、幅二五～三〇cm、底石はなく厚さ約二〇cmの砂利を敷いている。棺の東端近く頭蓋骨が遺存しており、遺物は碧玉管玉一、刀子一が出土した。

第二主体部　第三主体部の北側にあり、主軸を東西に置いて平行している。長さ約三・四m、幅約二m、深さ約一・二mの壙に、四壁と蓋石が各一枚の花崗岩で構成された箱式石棺を置く。棺の内法の長さ約一m、幅約二五cm、高さ約二〇cm、底石はなく厚さ約二〇cmの砂利を敷き、棺内には朱を塗布している。更に棺の東端には河原石を含むやや不整斉な石材を用いて狭い副室をつくり付けていた。側壁の上面と蓋石の間隙の充塡には粘土を用いている。遺物は棺内より刀子二、鉇一が人骨と共に遺存していたが、副室には何も見出せなかった。

第三主体部　中央よりやや南よりの長さ約五・五m、幅約二・三m、深さ約一mの壙に主軸を東西に置く長さ約三・五m、幅約九〇cmの組合せ式木棺を設置したもので、棺の中央南側に仿製の内

行八花文鏡（径七・五㎝）一、玉類（扁平なガラス勾玉一、碧玉管玉一三、ガラス小玉九）、棺の西側より刀子一が出土している。

第四主体部　第二主体部の東側、長さ約二・八m、幅約一m、深さ約六〇㎝の壙に、長さ約二・二m、径約三〇㎝の割竹形木棺を北四五度西に主軸を置いて設置したもので、朱の使用は著しいが遺物は全く遺存していない。

この四個の主体部の先後関係は、第三主体部が墳丘のほぼ中央にある事と追葬された主体部が先行する主体部の一角を破壊して設けられている事から、第三→第二→第四→第一の順であったと考えられる。郷土史会によって採集された土師器は五個（壺一・器台三・高杯一）であるが、いずれも小型で祭祀用と考えられる。但しどの主体部に属していたものであったかは不明である。

この遺跡の注目すべき点は、組合せ式木棺・割竹形木棺・箱式石棺の三種類を含む主体部四個が重複して遺存、その先後関係が把握された点であろう。また第二主体部が作り山古墳の箱式石棺に酷似しており、箱式石棺といってもかなり厚手（二〇㎝以上）の石材を用いている点も注目される。その上、作り山古墳と愛宕山古墳第三主体部は共に小型の仿製鏡を出土している。愛宕山古墳と作り山古墳に加悦町大師山古墳を加えると、この種の箱式石棺がこの加悦谷の地域的特色を示すものであるといえよう。

田坂野群集墳

京都府綾部市小呂町田坂、綾部市の北の丘陵地帯（通称田坂山）にあり、二段築成の方墳で著名な聖塚の西北方に当る。昭和三九年秋に桑園にするため造成工事が行われた際に発見され、昭和四〇年五月一二日から六月三日まで調査が実施された。もと一二基あったらしいが遺存していたのは七基、調査されたのはその中の五基である。

第三号墳　径約一五m、高さ約二mの円墳である。主体部は盗掘によって破壊されていたが、主軸を東西に置く壙を穿ち、その底に青色の割石を敷き、その上に組合せ式木棺を置いたものと考えられる。須恵器一〇（蓋杯八・甕二）が棺内と棺外に各五個遺存していた。

第四号墳　径約一五m、高さ約二・五mの円墳である。主体部は二個あり、主軸を東西において平行する。

第一主体部　長さ約三・六m、幅約一m、深さ約四〇㎝の壙に組合せ式木棺を設置したと思われる。東端より土師器二（壺一・杯一）、やや西よりに刀子一、西端に鉄斧一が出土している。

第二主体部　長さ約二・三m、幅約八〇㎝、深さ二二㎝以上の壙に組合せ式木棺を設置したものと思われる。東端より鉄鏃一五、

刀子三、鉇一が、西端より鋤一が出土している。

土師器はいずれも粗雑なつくりで胎土にも砂粒を含んでいる。鋤は長さ一四cm、幅一二cmのU字形のものである。

第五号墳　群集墳中もっとも低い地点にあり、墳丘の変化も著しいが、径約一〇m、高さ約一mの円墳である。主体部は、長さ約五m、幅七〇―八〇cmの主軸を南北に置く壙を設け、その底に棺の安定のためと思われる割石を置き、その上に組合せ式木棺を設置したものと思われる。主体部中央より須恵器四（坩・甑・壺）、碧玉管玉一、鉄鏃一が出土、封土中より須恵器の大型の壺と提瓶の破片多数が発見された。

第七号墳　径約二〇m、高さ約一・五mの円墳である。主体部は、盗掘のためその西半が破壊されているが、主軸を東西に置く土壙墓と考えられる。東端に須恵器の台付壺一が置かれていた。

第八号墳　径約二〇m、高さ約一・五mの円墳である。東西に主軸を置く、長さ約一・七m、幅約一・一mの壙に、長さ約一・四m、幅約六五cmの組合せ式木棺を設置したものと思われる。東端ちかくから須恵器の坩一、鏃五が出土している。

この田坂野群集墳の年代は須恵器の型式編年によると六世紀前半と考えられる。後期の群集墳が石室墳を形成せずに土壙墓をなしているのは、地域的条件を示すものというべきであろうか。

前田山群集墳

京都府綾部市小西町中山、高さが一〇～一五mほどの低い独立丘陵（通称前田山）上にある六基の古墳であるが、農業構造改善事業による破壊のため、昭和四〇年八月一七日から九月三日まで事前調査が行われた。

封土がほとんど流失してしまっており、稜線に沿ってトレンチを掘って主体部を確認したほどである。

第一号墳　東西に主軸を置く長さ約一・五m、幅約六〇cmの土壙墓である。鉄鏃二が出土している。

第二号墳　南北に主軸を置く、長さ三・五m、幅約七〇cmの土壙墓で、棺の両端に木口板を支える様にこぶし大の割石が詰めこんであった。遺物としては、U字形の鋤一の外に鉄鏃や刀子が出土した。

第三号墳　南北に主軸を置く、長さ約三m、幅約七〇cmの土壙墓で、遺物としては、土師器二（壺）、須恵器四（杯）が出土している。

第四号墳　南北に主軸を置く、長さ約三m、幅約七〇cmの土壙墓で、北端より須恵器五（提瓶一・杯四）が出土している。

第五号墳　この古墳のみは、封土が辛うじて高さ約一m遺存し

ており、その中に主軸をともに南北に置き平行する主体部が二個発見された。

東主体部　西主体部より約三〇㎝低く設置されており、先行する様である。棺は割竹形木棺らしく、棺底に朱の痕跡があった。遺物としては、須恵器四（杯）、剣形の槍先、刀子、鉄鏃、赤色ガラス小玉約六五〇個が出土した。

西主体部　第二号墳とほぼ同じ構造で、棺の両端に割石積みが見られる。北端に土師器一（壺）が出土した。

大迫第一号墳　前田山より約二〇〇m離れた低い小独立陵上の群集墳であるが、前田山群集墳に含めて記述する。もと四基あった様であるが、遺存していたのは一基にすぎない。約四五度で交叉する二基の土壙墓が遺存していたが、西側の主体部に棺底の朱の痕跡が認められたが、東側の主体部にはそれさえなく、共に遺物は全く見出せなかった。

この群集墳がいずれも土壙墓を内蔵する小円墳によって構成されている点は、田坂野群集墳に近い性格が考えられ、京都府北部における後期古墳の地域的条件を示すものであろうか。前田山第二号墳と第五号墳西主体部の棺の両端に小口板を支える様に割石が詰めこまれていた事は、粘土槨に内蔵された割竹形木棺の両端に粘土を詰めるという手法に共通するものであろう。遺物としては、径一～二㎜の極めて微細な赤色ガラス小玉が注目に値しよう。年代を示すものとして、須恵器の杯の型式は七世紀に下る様に思われる。

成山古墳群

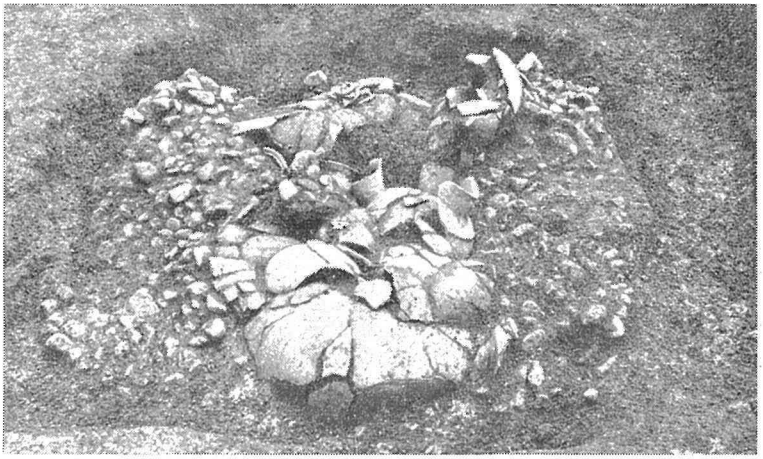
京都府綾部市小西町中山、前田山に続く丘陵の稜線上に三基あるが、一基は保存が決定、調査したのは二基である。前田山と同じ農業構造改善事業による破壊の事前調査で、昭和四〇年五月二六日から六月一〇日まで実施された。

第二号墳　径約二〇mの円墳で、南側には深さ約三〇㎝の溝の痕跡が認められた。主体部は、長さ三・六m、幅六〇㎝の割竹形木棺を設置した土壙墓で、遺物としては、飛禽文鏡一と紺色ガラス小玉約二〇〇個が出土した。

第三号墳　一辺約二〇mの方墳で、二個の主体部が認められた。

第一主体部　東西に主軸を置く、長さ約三・六m、幅約七〇㎝の土壙墓で、組合せ式木棺を設置したものらしい。中央に土師器の壺の破片が遺存していた。

第二主体部　第一主体部の西側、長さ約二m、幅約一・六mの壙の中に、第一主体部より約六〇㎝下に小礫を敷き、その上に土師器の壺を置き、周囲を灰白色粘土で巻き、その上にこぶし大の礫を



第二図　成山第三号墳　第二主体部

敷きならべた遺構（第二図）が発見された。壺は高さ約六〇㎝、腹径約五五㎝の大型で、大きく外反する口縁部は張り出して、頸部とは段をなして明瞭な稜線をつくっているが、その段の所に竹管文をめぐらしている。径約九㎝の狭い平底には径約五㎝の焼成前穿孔が見られる。やや長手の球形の腹部には刷毛目が見られるが、口縁部や頸部はなでられている。色調はやや赤味をおびた明るい黄白色を呈する。この大型の壺四個を含む六個の壺がすべて横位で東西の方向に並んで出土したのである。

この成山群集墳の注目すべき点は、まず遺構としては第三号

第三図　成山第二号墳　飛禽文鏡

墳・第二主体部の壺棺であろう。古い型式の土師器の壺が横位に並置されており、後述する宝蔵山四号墳と共に古墳時代の土器使用の棺の重要な資料を提供するものであろう。

次に遺物として注目すべきものに飛禽文鏡（第三図）がある。楽浪郡より数点出土しているが、それらと趣を同じくするもので、一段高い外区は素縁となり、鋸歯文帯、銘帯を経て内区となる。銘帯は磨滅して不明である。内区は鈕を胴部の中央に置き翼をひろげて飛翔する一羽を表現したもので、径九・三cmの舶載鏡である。

宝蔵山古墳群

福知山市字前田にある標高五六mの丘陵上に東西に四基の古墳が並んでおり、東より番号を付して呼ぶ。国鉄山陰線複線化工事の土取りのため破壊される事となり、昭和四〇年十二月九日から十二月二九日まで調査された。

第一号墳　径約一五mの円墳に二個の主体部が遺存していた。

第一主体部　長さ約三・三m、径約五〇cmの割竹形木棺を有する、長さ約五・九m、幅約二・五m、深さ約一mの土壙墓。棺外に鉄鏃五、刀二の出土を見た。

第二主体部　長さ約一・一m、幅約五〇cmの組合せ式木棺で、土師器の破片が出土した。

第二号墳　径約一五mの円墳に三個の主体部が遺存していた。

第一主体部　長さ約三m、幅約一・一m、深さ約四〇cmの壙の底に砂利を敷き、その上に長さ約二m、幅約七〇cmの朱の痕跡を有する組合せ式木棺を設置したものらしい。遺物は淡青色ガラス玉が約二五〇個出土している。

第二主体部　第一主体部とほとんど同じ遺構で、土師器の破片が多数出土している。

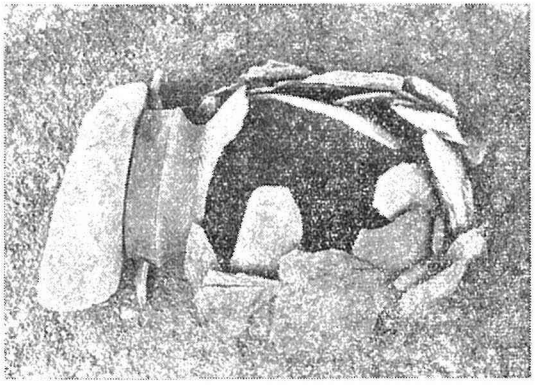
第三主体部　長さ約四m、幅約一・五m、深さ約四〇cmの壙の底に礫を敷き、長さ約四m、幅約八〇cmの組合せ式木棺を設置したものらしく、遺物は刀一、剣一、鉄鏃六を出土している。

第三号墳　径約一五mの円墳で、主体部は二個確認されている。ともに組合せ式木棺であったらしく、第一主体部よりは剣形の槍先、第二主体部よりは土師器の破片を出土している。

第四号墳　径約四〇mの円墳で、六個の主体部が確認されたもっとも注目すべき古墳である。

第一主体部　長さ約三m、幅約一・五m、深さ約四〇cmの壙に、長さ約二・五m、幅約五〇cmの組合せ式木棺を設置したものらしく、鉄鏃三が出土している。

第二主体部　大型の壺の口に板石を当て周囲を石塊で囲んだ壺



第四図　宝蔵山第四号墳　第二主体部

棺（第四図）である。壺は、高さ約六〇㎝、口縁径約三五㎝。張り出した口縁部は軽い内反りを持って七㎝ほど垂直に立ちあがり、突帯をへだてくびれる頸部には平行斜線が綾杉文を構成している。口縁・頸・腹の各部が明瞭に区分されている。腹部は長手の球形で刷毛目が見られるが、口縁部と頸部はなでられている。遺物は碧玉管玉一が出土している。

第三主体部　内法の長さ約六〇㎝、幅約二〇㎝、高さ約三五㎝の箱式石棺（第五図）で、四壁は各一枚の板石よりなり、蓋石は横方向に架した二枚が残っているが、他は失なわれている。

第四主体部　全長約二・三m、径約六〇㎝の円筒状の甕利用の特殊な棺で、三個の甕を連続して一棺を構成しているのである。胴部は甕の底部を取り去った円筒状のもので――その両端に甕を各一個当てがって蓋としている。全体をうすく粘土で巻いているが接ぎ目は特に厚く、周辺には他の土師器の破片で覆うて補強している。この棺を収めた壙は、長さ約三・五m、幅約一・五mであった。

第五主体部　大型の壺の口を口縁部を取り去った他の壺で覆う様にして塞いだ壺棺であ

第五図　宝蔵山第四号墳
第三主体部（右）　第六主体部（左）

る。棺身の壺は、高さ約四五cmの大きく張り出した口縁部が明瞭な稜線を経てくびれ、ほぼ球形の腹部に続くものである。

第六主体部　大型の壺の口を二個の小型の壺で塞いだ壺棺（第五図）である。棺身の壺は、高さ約八〇cm、腹径約六三cm、口縁径約四〇cmで、その口縁部に挿入された壺は、大きく外反し垂直の頸部に段をなして続く口縁部と球形の腹部を持つもので、高さ約三七cm、腹径約三〇cmを数える。そしてその底を取り去って、その口縁部に更に第三の壺を挿入しているが、それはラッパ状に大きく開いた口縁部が、くの字状に球形の腹部に連続する小型のものである。この三個の壺が重複する棺身の口縁部の下方を河原石でささえている。

この古墳群において、組合せ式木棺を内蔵する土壙墓が多い点は、京都府北部に共通する地域的条件を示すものであろうか。

四号墳は、六個の主体部が土壙墓・箱式石棺・壺棺・甕利用の円筒状の棺の四種を含んで一墳において存在している点が注目に値する。この古墳にのみ土器利用の棺の遺構が集中しているのである。しかも同じ壺棺でも、第二主体部は口に板石を当て、第五主体部は他の壺で口を覆うようにしており、第六主体部は口縁部の中に小型の壺を二個挿入して塞いでいるのであり、それぞれ様相を異にしているのである。

四号墳以外で発見される土師器が比較的小型で、煮沸に用いた煤の附着が認められる甕を含んでいるのに対して、棺身に用いられた壺はいずれも大型で口縁部の誇張された型式である点が対照的である。

一般に円筒棺は棺として製作された埴製円筒棺と円筒埴輪・形象埴輪を転用した埴輪棺が存在して埴輪との関連が強い性格を持つ事はよく知られているが、かかる実用の甕を転用、しかも埴輪棺の様に連続せしめて円筒状の棺を形成している点は、まだ他にその例を聞かぬ遺構である。しかし粘土で被覆していた点などを考慮すると、やはり埴輪棺に近い性格が考えられよう。

第六主体の口縁中に挿入された壺の型式は、奈良県桜井茶臼山古墳・京都府西山第四号墳・岡山県金蔵山古墳などの出土品に共通するものであり、この四号墳の築造年代がかなり古い時期にさかのぼる可能性のある事を示している。勿論、追葬を含めると、その年代にかなり大きな幅のある事は当然予想される所であろう。

遺跡のすぐ近くに、土師という地名が存在するが、このような土器を棺として利用した一墳多葬の遺跡は、土器製作集団の居住する地域の特殊例と見るべきであろうか。

（堤圭三郎＝京都府文化財保護課
吉本昭俊＝京都大学大学院学生）